ジャルゼント氏第三リイドル
下
87

東京帝國大學圖書館藏書印

サルゼシト八第三リイドル巻の下

愛應義塾同社　柗山棟莽　譯

志邊里屋の女丈夫の事

北女丈夫ハ普良須古琲といへる少女なり彼千七百九十五年ふ當り魯西亞の帝ふ歎願て其父ゲ追放せらるたる赦免を得んゲ為志邊里屋より新都平土留保留府まで遥々と數百里の旅行をなして其間八個月の久し

きて費せりといふ○志邊里屋ハ魯西亞帝國の一部落ふして世界中ふ比類少なく寒國ふ○佛蘭西の婦人骨砧ゞ著しるる志邊里屋追放記と題せる物語の趣意ハ普良須古琲ゞこの難難の一事ふして普ねく世人の愛讀せる所なり下文ふ記せる如き新都平土留保留府ふかねて魯西亞の皇后と普良須古琲との偶然の對話ハ全く其実録なり

后　汝少女近く進みて吾傍ふ坐せよ我汝ゞ物語ふ付きて尚も聞まゐしく思ふ事ゆり汝此旅行を思ひ立し始めハ何物ゞ汝の心を動かせしや

汝ゞ父ゝ勸めしや　少女　噫否ゆらず吾父ハ固く此事を許さゞりしが其同意を得るまでふ久しく月日を重ねしゞ妾ハ日夜天を拜し吾父の許させ給ふことを願ひしより終ふ願望成就しといと嬉敷旅路ふ出立致したり

后　汝ゞ母も同じくこの企を許さゞりしや　少女　吾母も始ハ妾ゞ此企ふ異名して妄想の謀と云ひ笑

ひしくども一年二年と日を重ても妾が志しを変ぜざるもバ妾が深き思ひ込も天の命ぞる所ふらんと母が信仰ひろしく遂ふ此企を助くるふ至り后さもバ汝ハいかふして帝の御前ふ出るを得んと豫ゞめ定めしや又汝ハ貧しき身ふして親しき友も乏ざるふ如何ふして帝の御聽ひろんとハ兼て望を起せしや少女假令一人の弱き女ふがくも其志ざを所ハ両親の追放せらるく望きなき身を助んとなるバ必ず天の恵もひろて親しき人も多かるんと思ひ又妾ハ天ふ此身を護らせ給ふを深く心ふ信ぜしも其護ひハ決して吾身を誤ることなし后汝ハくの憂き旅行なるしが更ふ艱苦もなるしや又身の危ふき難ふ逢ハざるしや少女吁よく問せ給ふ哉妾ハ二回び病ふ罹ひ一回び水ふ溺れんとせり又或る日の事なるしが淋しき僻郷ふて日も暮たるふ一夜の宿を需めんふも便なく或扃の外ふ立ぶみしそれ一人の

老翁打て始めハ妾を咎め呵りしが遂ハ妾の跡を逐ひ来りて彼が住家ハ案内せらるたり此家の内ハ老婆打しが老たる丈婦共ハ其面貌の善人とも見へざれバ其時妾が心ハも甚だ驚きたり扨妾ハ内ハ入て坐を占るバかの老婆ハ物静ハ門の戸を鎖して後丈婦の者妾ハ向ハて云く汝ハ何國ハ赴くものなるやと問けるに妾ハ新都平土留保留府ハて赴く者なりと答へしバ老人の云く左程ハ長き旅行をせんハ定めし數多の旅金を所持ハしと妾ハ偽りもハく其實を告げく只コッペーク（魯西亜銀貨の名九を二我一銭ハ同ト）三貯たるのをなりと云ひたるども丈婦の者ハいと厲々しく猛き姿ハて汝ハ謟ひ成云ハんと痛く妾を非難せらるたり后少

女よ汝其時大ふ恐をぢ〜や今云へる夫婦の者ハ必ず盗賊なるべし斯る危ふき難ふ逢つゝ
よくも其身を保ふせしや少安老たる夫婦の早く
寝間ふ入べしといひける由妾ハ其言ふ従ひ
寝間ふ入たるど若し夫婦の者ゞ吾財布を吟
味せんとなるバ吾言の詐りなる知しめんと
て態と意を用ひて吾財布を寝床の傍ふ出し置
たり然るふ夜半の頃いと劇しく呼起せしに
眼を開きて見るバ彼の老婆ハ妾ゞ枕下ふ突立



たり妾ハ其恐しさふ身の毛もよだつ計りし
ゞ老婆ハ財布を開き見て其中ふさしたる金子
の幾ばくさをハ望を失ひたる体なり此時妾ハ只
管命を助け給へと願ひこの財布の外ふハ更ふ
金子の用意なしと云へるど老婆ハ返答も世ず
妾ゞ衣服を一々取調べ長沓の中ふも金子ハふる
きうと吟味せり老人ハ手ふ燈火を持て老婆ふ
付添ひ色々詮索しるど妾ゞ身ふ金子の
ざりしうバ終ふ妾を見限りて彼方の部屋へ

立去りける后さればこそ汝ハ其隙に彼等が住家を
遁れ出んとせざりしや彼者共ハ汝が身に取る
べき物のなきに怒り痛く汝を呵責まることも
なるべきに汝ハいかに其事のなるべきとも
ハ思ひたるや妾も初めにハいかにもして此
屋を遁れ出んものと思ひしが能々憶ひ回
ば斯までも天の吾身を護らせ給ふたまへバ此後
とても必ず其護をなるべしと篤く心に信ぜし
唯一心に天を祈りて先吾父母の為め次に

吾身の為め又次に彼等夫婦の為にも其幸福を
下しまんこと念じて斯して後心静に安
き眠に就しかば又明る朝妾が起出し頃ハ
窓の戸照る朝日影降敷く雪に映きていと麗ハ
しき景色なりしが老たる夫婦ハ朝飯を取んと
て忙しき体なりし妾ハ定めて無氣にも投
んと思ひ惶々かに寝所を出行けるが案に相
違の事にて老婆ハいと深切に妾を扱ひ昨夜ハ
よく休ませ給ひしかと挨拶せしに妾ハ答

へて仰の如く昨夜ハ心よく休またり今ハ旅路ふ出立せんと思ふと云ひもバ老人夫婦ハ妾ふ勸めて先々こゝふ坐を占めて朝食なりとも取て給へと云へと占そハ汝を毒害せんとの謀ごとなり夫婦の者ゞ情なりげの面容ハ必ず詐りありしなるん汝何品ふても喰ざりせで宜らんと思ふあり妾さもども妾ハ甚ざ飢たもバ多くの食を取きりこの時老人夫婦ハ妾ゞ身の上を尋ねしゆ名妾ハ路用の金もなりで吾家を立いで帝ふ歎願して吾父の追放せらをし赦免を得ん為め人の扃ふ立沿て其憐を乞ひ新都平土留保留府まで獨を旅なる云々の由を殘る方なく物語をバ夫婦の者ハ妾ゞ話ふ耳を傾け眼ふ涙を流したり老婆ハ妾を傍らよ引よせ云ふハ願くハ昨夜の事を忘き玉へこハ一場の夢とのを思ふべし汝ゞ心意のやさしさ其身の上の憐さふ紮ゞ心をも柔げたり汝此家を出て後路用の金子を筆ふるなりバ紮ゞさの

を惡人ふもたくさる事を思ひ知らるべしと斯て夫婦の者ハ妾を深く親しき妾が口吻をも啜たるバ妾も懇ふ暇乞して旅路の方ふ出行たり叔二三里許も路を行たる頃の老婆が云ひしこの合点行ざるバ財布の中を調べんと頻て之を開き見るバ不思儀や賄の外ふ又四十司ペーク」を増たるバ妾が驚き大方ならぬ其後人の話を聞けバ彼の夫婦の者ハ果して名高き盗賊の由なりし后汝が擧動ハ無為ふして巧ふく



且汝が旅行る趣意ハ人の心を感動けきバ彼の老たる夫婦が罪深き頑固の心さへも解たるなり又汝が彼等の為ふも其幸福を祈事の天の耳ふも聴へしなんぬ加之ある人の罪をも贖ふべき汝が善根の種をもて夫婦が心の田ふ蒔たるバ彼等が流せし涙こそ其種を養ふべきよりに潤ひとハなりたるあらめ安さハ肯て望む所なり叔又妾が父の追放の赦免を得べき望みなりや何の時ろ父の事ハ帝の御聴ろ

べきや我王宮ふ誘ひ斯く真實ふ扱ふそを若し我父ふ知しめば父ぐ心を厲まして其喜びハいかんん　后今汝ふ聞せて悅ばせたき事なり乃ち吾手ふ持てる此書付ハ汝ぐ父を赦免なり魯西亞の肉地ふ歸るべき旅行の路用の金子を渡せと吾帝よりの仰せなり汝なりの嬉きふ氣を取失ふことなりきとて其書付を示さたりとぞ

氣高き心の威勢なる事

荒火屋の沙漠ふ住へる一人種の中ふ根比亞と云へる善人なりて一匹の名馬を所持せり同國の他人種の中ふ太非亞といへる人なりて頻ふこの名馬を懇望して得まゝく思ひ或ひハ自分ふ所持せる駱駝と換んともいひ或ひハ彼の馬を讓るなりバ我身代を盡く與んともいひたりども根比亞ハ敢て美引ざりもバ遂ふ彼の馬を手ふ入べき一の謀をぞ思ひ付けるさを草の絞汁ふて自分ふ顏を染め身ふ襤褸を纏

ひ長き紐をもて一本の足を頸ふ結付け偽りて
跛の乞食となり全く容貌を換て彼の名馬の主
人根比亞が通ふべき路筋ふ出で〻其来るを待
受しが斯とも知らぞ根比亞ハ美々たる馬ふ跨
と此更ふ近きしが右の乞食ハ態と細き聲を立
て根比亞を呼かけく僕ハ貧しき他國の者なる
が三日三夜の其間食を需むる便をなく空しく
こゝふ留まりて今将ふ死せんとせり君若し僕
を助るならバ後日必ず天の報應ありんと辞を



巧みふ云けるバ根比亞ハ馬上より之を聞て汝
我と共ふ此馬ふ乗らバ吾家ふ伴ふべしといと
深切ふいひもバ彼の乞食ハ僕甚ぞ疲きたれ
バ起き上らきく叶ぬといひける由ふ根比亞
ハ堪へぞ自から馬より下り
憐れの情ふ
轡を取て此賤乞食の傍ふより様々と介抱して
やりく彼の馬ふ乗らしめたり斯て太非亞ハ自
ら鞍ふ跨りたるバ忽ち鐙を蹴て立て馬を飛
して行つゝ根比亞を顧みていまく斯くせし者

ハ太非亞なり我今汝が馬を得て已ふ吾有とせそとさるども根比亞ハ格別驚きたる氣色もなくこを代指招きて汝暫らく止まれて吾云ふ事を聞くべしといひけるふ太非亞ハ馬上の事なるバ假令追とも遁ふ易かるまんと思ひ

て馬の頭を引返して根比亞が杖ふ突たる鎗の石突の間近き處まで歸を来るバ根比亞の云ふやう汝今吾馬を奪ふたるこハ自分ら天意ふ出る所なるバ實ふ汝が喜びを祝すべしさるども汝が此馬を得し謀ごとハ決して他人ふ語るを聞て甚だ訝しく思ひそハ又何故なるやと尋ねけるバ根比亞の云く何ふとおもバ若し世人の實ふ病苦ふ悩める者ならんとき我今欺むきし如く他人も亦欺

むつまんことを恐るゝ時ハ假令その赦ふべきをも救ひ能ハざることのわろくべけれバあり故ふ若しこの事を他人ふ語らバ汝ハ人をして仁愛の行ひを損ふてしむの賊ともなるべしと云事ハ太非亞も之を聞て感服し心中大ふ恥たる樣子ふて暫時ものとも言ざりしが良ありて自分ら馬より飛下て馬を根比亞ふ返して其足下ふ跪つき只管罪の宥さんことを願ら斯て太非亞ハ其罪を容易く免さるけれバ根比亞を伴ふて已が住へる天幕の中ふ歸る二三日の間根比亞をとゝふ逗留せしめて爾後ハ互ふ親しき朋友となりぬ

良美由須が事

往昔佛蘭西ふて有名なる理學者昆井留良麻ハ學者の社中ふく良美由須と云ふ人あり此人の幼少なる時の行ひを見るバ假令天稟英才の人たりとも亦必ず孜々として學問ふ勉强せざるべからざることを證するふ足べし抑この

良美由須ゞ祖父ハ白耳義ゐて禮圖といへる地の貴族なりしゞ或時國中兵乱の為ゐ悉く家産を失ひ事ハ當時乱を避て佛蘭西ゑ往き続ゐゐ炭を賣買して一家の生業を營ミし程なくバ常々其子の教育ゐも暇なくて良美由須ゞ父ハ一生貧しき農夫なりしゞ彼の一千五百十五年ゐ當て良美由須ハ誕生せり却説此良美由須ハ齡ひ穿ゐ八歳の時粗末なる農夫の衣服を着し毛織の帽子を載きて獨て巴里斯の都門ゐ入て或る街ゐ到て折節此處ゐ學校の少年多く群集て互ゐ戯を遊び居けるゞ良美由須ゞ田舍裝束ゐて物珍らしく左右を顧みつゝ過行き樣子ハ紛もなく田舍者と見へ彼少年等是を弄び思ひ忽ち良美由須ゞ周圍ゐ集り来て色々の事を問ひけ或ひハ嘲て笑ひなどし終ゐハ暴き舉動をもなしけるゐそゞ中ゐ心意やさしき一人の少年ハ良美由須ゞ顔色の青くして痩せ衰へたるを見て

貪りき人の飢たるたるんと思ひ少し許の蒸餅を取て良美由須ふ與へ給ひ良美由須ハ之を戴きて食ひ其為よ忽ち力を得たる容子ふて我甚ぐ遠き路を旅して大ふ疲れたりといふ彼の少年等ハこの言を聞て心なく暴き取扱ひをたりたるを自かゝいと愧ゝしきことふ思ひ共々良美由須をいさりて傍ちふ坐せしめさ斯をしゝバ良美由須も又甚ぐ心嬉しく氣も爽ゝふなりて彼の少年等ゞ打てゝりたる深切ふて良美由須ゞ身の上と其旅行の様子とを委しく尋ねゝバ一々其の返答をなしたるとで其返答の次第ハ下文ふ記せる良美由須ゞ物語ふして其言巧みく又かざりあれを見るふ足るべし

我八年前久須の里ふて生を初て歩く習ひ一項しゝなくも吾両親を亡ひ我を養育なく親類としても巧みざるバ詮方なく里内の善人ふたよ其慈悲を乞て絶ゝふ朝夕の露命を繋ぎ粗末

の蒸餅とても之を貰ふて吾飢ゑを充るるに足ハ十分の事と思ひ偶々一疋の乳粉一本の生蔥又ハ少しの塩を得るバこの上もなき幸ひと思へ斯て我漸く生長しるバ最早里人等ハ一日も遊惰ゑ送るを許さず吾手ゑ長き竿を取らせて鷲鳥の番をおさしめたり我日毎ゑ彼の鳥を駝て沼田まで追行しゑ吾身の疲労ハいとゝ甚なくして彼の鳥ハ固より吾聲を聴き覺ず縱令竿ゑて鞭うつとも決して吾意ゑ從ゑず此所彼所ゑうけ廻りて日の暮る頃再び彼の鳥を駝を集めて主人の家ゑ連歸るハいとく六敷仕事ゑりし或る日此鷲鳥の為め余り疲れるバ終ゑ鷲鳥を其侭沼田ゑ放ち置き彼の竿をも森の中ゑ投て志ざしを決して巴里斯の方へと出立せりさて路用の金子もなくなれバ詮方なさゑ人の戸口ゑ立て食をも乞ひあるり然るゑ吾が運命未ざ拙かざるや途中ゑて一人の君子ゑ出逢ひ暫くの間我を伴ふて旅行

ものを許さきたり蓋し其人へ必ず大なる學者ふて行うしたらんゝ何ふとおもへば彼の人と共に宿を取りし夜へ終宵我ふいろはの文字を教へ且此いろはもて語を綴るの法をも教へたるバ是ふて知るべきなり今我此已里斯ふ行きバとて一錢の貯へもおくして舊時の如き貧生ふきども吾旅の途中ふて此事行うしたり頻ふ學問を為んとの望を起せり噫天若し我を憐むふらバ諸君の中誰か一人をして吾教育を助くるの情を起さしめざらんや



良美由須ハこの物語を終て後彼の少年等の為め學校ふて小厮の役を勤め食客となりて教を受たりとの義を歎願しけるバ彼の少年等この願を義知したりども良美由須ゞ止宿の場所ハ固より約束の外なるバ良美由須ハ止むことを得ず夜毎ふ市中の橋下ふ往て卧せざるを得ず良美由須ハ斯る身の艱苦不便利なるをも更ふ厭ハず只管一心ふ學問ふ勉強し日ゝ

て羅典希臘の古語をも覺へけをば學校の或る督學先生の目ふ其人の世話ふて更ふ規則正しく教を受るの場合ふ到るしそを斯て良美由須ハ終ふ有名の大學者とハなり其博學おろと世ふ珍しき英才なりとハ彼ゞ數多の著書を見て之を證べし又世ふ所謂る大學者ふるもの多しと雖ども猶良美由須ゞ如く名聞高く衆人の嘆稱を得たる者少く又其為ふ良美由須ゞ如く衆人の妬心を受たる者ハ甚だを惜



哉良美由須ハ年五十六歳ふしく世の騒乱ふ逢ひ不幸ふして無道の殺戮を受たりとい

麻久列五留と良門土との事

怒を發せざる能ハ得ざる時能く憤怒の氣を抑へ讐を報ハざるを得ざる時能く復讐の思を断ハ誠ふ人たる者の尊き行ひと云ふべきなり往昔蘇格蘭ふ住める或る一人種の酋長某ハ能く此行ひをなし遂たる者と謂ふべし即ち其人の一例ハ最も美談ふして永く世ふ傳ふるふ足るべ

きたり

此酋長の名を麻久列五留といへる或る日其一子同じ少年の友達數人を伴ひ山野の狩に出行しが此所彼所を徑巡る内良門土といへる少年に出逢ひたりこハ兼て親しき知人なるをバ共に憩せんものと少年の面々打連て最寄の旅籠屋に立寄たり扨此麻久列五留の子息と良門土とハ斯る親しき朋友の出會なれども此旅籠屋にて共に酒を飲始めしが不圖鎖細の事より爭論を起し双方とも酒氣頭脳に上り智恵分別も薄ろぎて心荒猛しく成たるをバ忽ち互に讐敵とハなりぬ此爭論の元の起るハ如何なるしや別に記せしものもなけれど必竟之を察るに恐らくハ此方より戯れに一人の盃を敵き落したるを彼方にハ深く我を輕蔑せし擧動と思ひしゆゑんに又或ハ彼方より誤て足の指を踏めバ此方にハ憤りて彼方の顔に盃を投付しにらんに兎角に酒に酔たる人ハ一すしの事より

も爭論を起をらのなり扨此時の爭論漸く聲高ふなりて忽ち拳の打合を始め果ハ双方劔を拔て戰ひしが竟ふ良門土ハ短刀ふて麻久列五留が子息の胸を突通せり斯て良門土ハ人を殺せしより心ふ恐を抱き暫く忙然と立居たりしが良門土ハ元来柔和温順の少年なりと此時ハ酒の為ふ心乱く人殺しとハなりたるあり却説この騒ぎふて混雜せる隙を伺ひ良門土ハ何國ともなく逃行しが彼の少年の銘々ハ首長の子息を殺さたれバ良門土が跡を慕ふて追行より良門土ハ逃る路ふて日も暮けるバ幸ひ路傍の生茂りたる樹の下蔭ふ潜りて深く身を匿し其夜もやや明ふんとする頃見當をたる迂き人家ふ到りて案内をこへり此家の主人其聲を聞て門の戸を開けバ顔色惨然たる見則ぬ少年ふていと疲きたる体なり此少年の云けるハ君願くハ吾一命を助け給へ數人の少年我を殺さんとて追ッけ来るなりと主人之を聞て足下ハ如

何なる人ゝもせよ斯て吾家ゝ訪ふんゝハ假令何事なりとも一命ハ大丈夫ありと云つゝ良門土を奥坐敷へ案内して一家の眷族ゝも面會せしめたり斯る折しも又門の戸叩き大音ゝて一人の見馴ぬ少年この家ゝ来りしやと呼ばりけきバ主人答へていゝゝも其少年ハ吾家ゝ訪ふ汝ゞ輩この少年ゝ何等の用向ありやと云あるバ此時追人の面々其少年ハ昨日不圖した爭論より君ゞ賢息を殺せしものゝふきバ然即坐ゝ其





憤を晴さんため追掛来りたり急ぎ其少年を此へ出し給へと口々ゝ呼ばりて斯く云ふ人々ハ昨日麻久列五留の子息と共ゝ將ゝ出掛し少年等ゝて良門土を慥ひたるハ麻久列五留ゞ住家なりし叔麻久列五留ゞ妻と二人の姉妹と也事の次第を聽て驚き心も裂る計りゝて泣悲しゝ居たりけるゞ良門土も今ハたまり兼かくとして主人ゝ向ひ吾罪已ゝ露見せし上ハ今更君ゞ助けを願るゝ道なし彼の少年共ゝ我

を渡し給へと云ひもはば此時門の口ふハ數人の少年面々拔身の刀を振立て其少年を此へ出し給へ彼已ふ生べき者ふ行らずと口々ふ叫び しグ首長麻久列五留追人の者ふ云ひもハ汝等静ふ我言ふことを聽けよ汝等若し我子の面目を重ぜるならバ定めて我面目をも亦重ぜるあらん汝等今一人たりとも決して此少年ふ手ざしすることを勿れ其故ハ我一旦彼が命を救んとの約束なしもはば今更其詞ハ違ひ難し



さもバ此少年の吾家ふ行る間ハ其一命ふ於て安穏なるざるを得ぎと斯く立派ふ云ふも麻久列五留ハ両眼より瀧の如き涙をたらくと流しけり其心中ハいかんや麻久列五留ハ頻て彼の追人の者を追ひ歸して良門土を色々深切ふ饗應し加之なる武器を裝ひし者十二人を召連て自ら良門土を警護して其親族の住所まで難なく送り届け其別るふ臨んで良門土ふ云ふハ足下の身も已ふ安穏ともはば我

最早足下を護ること能はず足下再び吾人種の境内ふ入ること勿き嗟天足下が罪を赦して足下ふ幸を賜るあらんと斯て麻久列五留ハ吾家の方へぞ歸りぬ

良門土ハ麻久列五留が擧動の氣高きを見て大ふ其德ふ感ず天を拜して何時ぞこの大恩を報ゆべき時の至らんこと祈りたりさて光陰ハ矢の如く良門土ハ壯年の男子となり兼て誠実の心より前非を痛く後悔し其行ひを改め

て温厚柔和の人物となりふりされども折々ハ過ふし事を憶ひ出して甚ず心中ふも快よからざりしが斯て月日を送る内此國の政府ふて不正の處置ありしより麻久列五留が家産を欠所ふし加之あらぬ當人をも罪ふ處せんとて捕人の者を差向けしより斯て麻久列五留ハ良門土の方ふ身を避しが良門土ハ兼て待得たることふきバ此機會こそと思ひ其嬉しさふ覺えず涙を流しつゝ麻久列五留及び其家族までも厚く痛

まして何事も真実ふ取扱ひ始めて舊恩を報ひたるバ良門土が大惡無道の行ひも今ハ聊ゝ其罪を贖ひ得て老後臨終の時ハ及びても死出の心安くして其往生を遂しそなり

## 金財布の事

魯西亞の首府ふる新都平土留保留府を距こと凡そ五里計の處ふ一ふ都會の地ふり此地ふ一人の貧しき老婆住まふ其所持の物とてハ唯一びしき草舍のみにて折々船主の來るを頼ふ細き烟りを揚げ居たり或日の夕方和蘭の船主數人この家ふて夕飯を食し已ふ出立せし後ふて彼の老婆ハ食椅の下ふり封印せし金財布を見付出せりこハ今歸りたる船主の内ふて誰ふ忘れ置しふ相違なけれども其人々ハ船を乘出し折柄順風ふ帆を揚たることなれバ再び歸りくべき折もなく此老婆ハ生得善人ふて聊の私欲ふあらずバ彼の金財布を拾ひふ房の内ふ藏め置きて忘れし人の尋ね來るを待居たり

斯て七年の久しきを経も絶て之を問ひ来る者もなかりしが此年月の間ハ金子入用の折も多く殊ニ貧苦ニ迫る身ニ成しハ屢々老婆が鄙き心をも誘ひ奪ひ固より天性の正直者なればハ変してかの財布ニハ手も触ることあるまじきを扨或日薄暮の頃例の如く船主四人連ふて此家ニ立寄りニ憩せり其中の三人ハ英人一人ハ蘭人の様子なりしが互ニ四方山の物語をなせる内一人の英人蘭人ニ向ひ君曽て此地ニ来りしことやと問へバ蘭人答へて我先年此地ニ来りしが今ニ於て此地を忘れ難きことなり我ニ来りしハ為めニ七百「ロベル」亜「ロベル」ハ魯西亜銭の名大九銭ニ同ト二十五の銀子を失へりと云へり英人の云くそハ又何故なりや蘭人の云く其仔細ハ我先年此邊の茅屋ニて金財布を置忘れしことなり云々と物語る時彼の老婆ハ同ト一間の隅の辺ニ坐を占て此話ニ熟々と耳を傾け聴居たりしが蘭人ニ向ひて君が置忘れを給ひし金財布ニハ封

印ありしやと問けるに蘭人答へてをハ勿論の
ことなり其封印ハ余が此時計の鎖ふ付たる封
印を用ひしなりといへバ彼の老婆ハ目前封印
の偽りなきを見て君が金財布ふ封印さへなる
なるバ金子ハ必ず再び君が手ふ入べしといい
ひもきバ蘭人の云く其許ハ吾銀子の手ふ入る
こともなるんうと云るふ決して無き
事なり吾銀子を回復さんふも已ふ其機會を失
ふたり其許が云きる如くふ亞の人ハ皆正直ふ



らずして余が銀子を失ひしより以来七年の
久しきを過るをや願くハ此事を再びいふこと
勿き我常ふ之を思ひ出せバ其為ふ心の鬱憂を
覺ゆるなりと云て此折しも彼の老婆ハ竊ふ其
席を立て彼方の部屋ふ到りまるが間もなく手
ふ一の金財布を携へいでて見給へ君が謂
もたる程ふハ亞の中ふハ正直者も稀なるなどと
云ひつゝ彼の財布を机の上ふ投出したりさも
バ一坐の船主等ハ事の意外ふ出たるふ驚きく

仰天し殊更金を失ひし蘭人ハ飛立ばかりに喜び
しかさらばなんと思ひ違ひたり此蘭人ハ
直ち金財布の封印を開き一ロベルを取出し机
の上ハ置てかの老婆ハ一禮を述て其勞を謝
しかもまた三人の英人ハこの謝金の甚だ少き成
見て或ハ驚き或ハ怒を頻ふ熱くなりて物事
の道理を論ぜしかども老婆ハ我唯人た
るべきの職分を盡せしのみなれバ決して謝金
を望むの道理なしといひて蘭人ハ與へたる一
ロベルをも故ふ叔め給へといふ然れども彼の
英人等ハ目前益の公益を失ふべからざるを様
々の義理をのべ此老婆ハ感心ふも氣高き行ひ
を為したる者なればハ其報賞ふかるべかりしと
云へども蘭人も亦終ふ此理ふ服して百ロベルを
もて謝せるとふ決て金財布の内より之を
今ちく老婆ふ與へたり斯てかの老婆ハ已が正
義の行ひふよりて公然と厚き報賞をも得たり

自かゝ省みる事

爰に一人の有徳の者ありゝ其一子ハ生得愚かにして父の行ひに肖ぬ且父の意見をも用ふるふく日常悪友と交て淫乱放蕩にのみ耽て其心益奢て全く身の徳を失ふに至るを見てハ彼の人ハ吾子の斯く身持の放蕩に流て悲しき居たりしが不圖重き病に罹て自かゝ其死期に頻りたるを知て一子を枕下に呼び寄せ云ふハ汝自かゝ身持の悪きを懲らひ我辱しめを受むとて恐悼うるとく勿れ我ハ今にも世を逝べき身なるをバ汝宜しく吾名跡を續べしさるバ今汝に云ふべき吾臨終の一言ありゝ之を守るハいと容易きてとなりをバ汝必ず此契約を我と結び得べしいへバ彼の子息答へて吾身に叶ひしことなりバ何事にても父の遺命を守るべき契約を結ぶべしと云へり此時死に臨たる老人の云く我汝と契約せんと云ふハ餘の事にハ吾妄を去

て一後ハ二個月の際汝必ず毎夜此坐舗ゟ来て
て獨り坐を占め一時半づゝ思案ゟ時を費もぐ
しといひ、まをバ彼の子息ハ必ず真実ゟ父の訓
を守るべしとの誓を立たり老人ハ大ゑ喜びて
其子を譽めつゝ頻てたゝなくも此世を去ぬる
り斯て葬式を營を終て彼の子息ハ旧の如く悪
友と交て身の上の考へもたなく樂しゝ居たりけ
るが必ず日の暮る頃ハ嚮の契約を思ひ出し
て父が臨終の面影のありくと其心を責るよう





己ことを得ず彼の坐敷ゟハ到もとも初の内ハ
獨を居るを甚ず苦しゝ思ひ且坐敷の内ハ寂々
として物をでゝ何となく恐怖るゝの心りさ
をども絶ゟ二個月の月日ハ忽ち過去るなんん
と思ひ既ゟ誓を立しことをバこの淋しさを
も堪忍びたり斯て彼の子息ハ夜々此坐敷ゟ来
て考ふる際不圖己が身持の悪きゟ心付きて
己が身をバ己が心ゟて責め自然と天を畏る
の志しを起し自かゝ問て自ゝ答つ終ゟ潛然

と涙を流すに至り其後は志しを改めて全く從前に異なる人物となりたりと云ふ

富る人と貧しき人との事

今日開化の國に就て其農工商の三民を比較するに身の苦勞は於ては強ち世人の想へる程貧富の間に區別なることなし抑貧しき人の中に実に食物の乏しきが為に餓死する者も亦多し又衣服に就ていふに貧しき人は寒氣を防ぐ術なくして凍へ慄ふ者も亦た富る人は衣服の仕立に於て身に害なる好をふし必ず時の流行に隨ふて樣々窮屈の衣服を用ひ其為に病を招くもの貧しき人にて衣服に不自由なる者よりも甚だ多し其故は世の富家に生まれ錦繡を暖かに着過して其為め早く黄泉に往く者は彼の身に纏ふべき襤褸もなき乞兒の橋下に死するよりも亦更に多きをばか

り又貧しき人ハ假令度を越て身を勞することあるとも其身の苦勞ハ却て富る人よりも多かるべし何ふとなれバ人の身を勞するやこと皆天性心の求る所ありふ若し富る人ふて此求め ふ應ずべき何等の事業もなく時ハ一生の際大切の目的を失ひたる者と云ふべきなり且何等の事業もなくして身体の憊きたるハ勞役過度の為ふ身体の疲るゝよりも其害甚だしらん懶惰の少年悠々と市中ふ徘徊し無用の時間を費して彼の事業ふ勉強する貧人の為ふ其妬心を起すべかゝらず斯く他人の妨げをあなる者ハ大率ね富貴の人ふなるなり

酒を禁じ食を節する事

近代の學問ふ於て酒類ハ悉く人身ふ害ありとの道理を益々明らふ知り抑酒の害を来ぶハ寛慢なるとも必竟多くの之を用ゆるバ心身共ふその力を失ふハ必定なり且酒を用ゆるバ人の頭脳を害して其身ふ諸病の種を蒔き人を惰ら

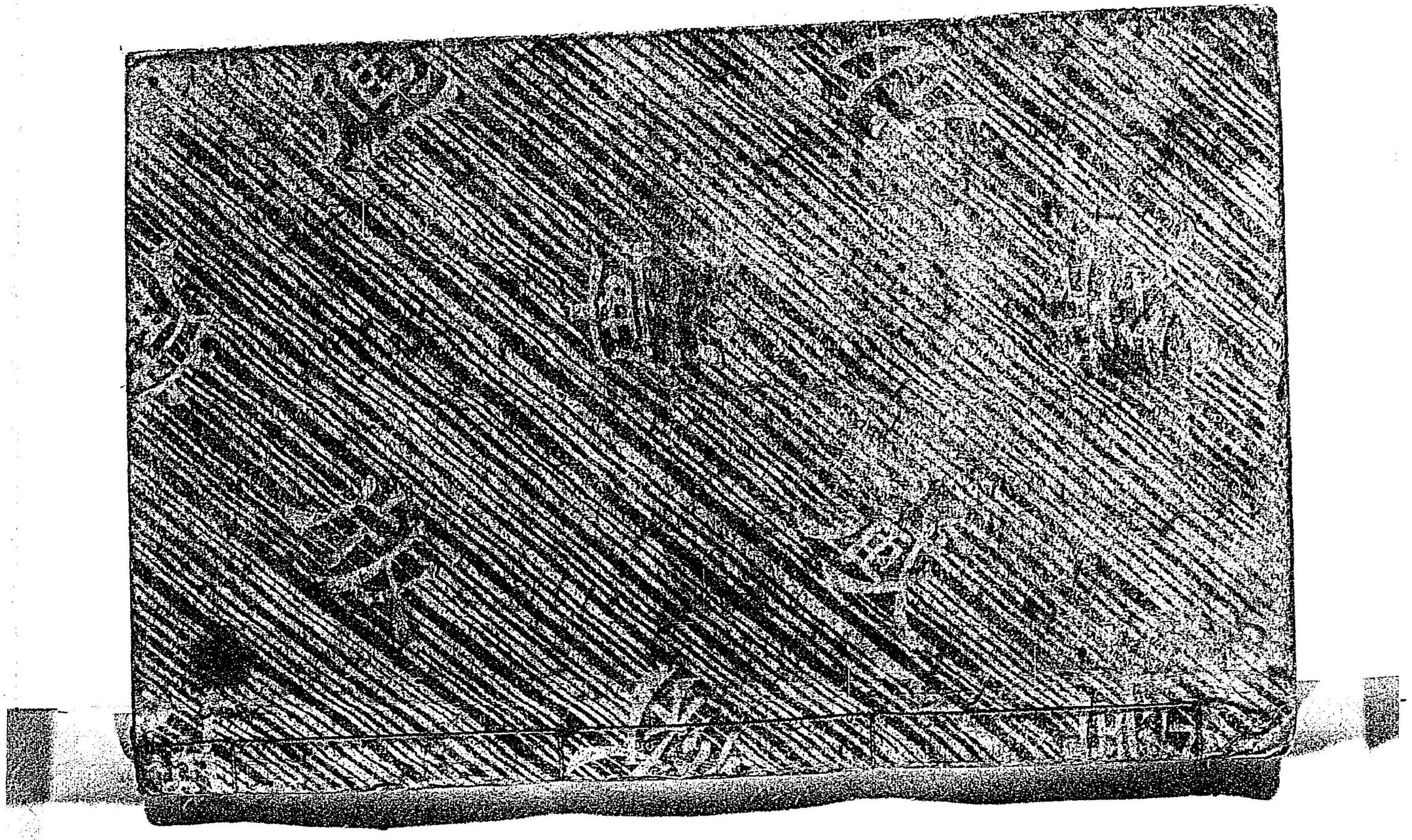
しめ人を愚ふト人の不善を招くこのなり或ハ
強き飲料ふハ少しの水を加へ用ふるバ其害少
ふしと思へる者もなれどこハ大ふる誤ふて假
令水を加ふるも只酒の毒を薄めたるすでのこ
となり武蘭実初須喜ふとふ水を加ふるも決し
て其毒性を消をりのふなりを唯劣ふ其味を
よくするのをなり若し飲酒の友ふ誘ふ者ハ
バ必ず之を賤ふて避ざるべからを人間の飲料
中ふて最も良きものハ水なり水を飲バ血を清



涼純潔ふし且胃府頭脳等の機用を調へて和順
ふしむるものなり故ふ水の如きハ心を爽ら
ふし身を強くすべき最上の飲料と云ふべきふ
曾て或る兵卒の栗宮（欧羅巴曾西亜ふ於る半島の名）より贈
りし書翰の文言ふ云く黎屯管中只の一夜も寐
床の中ふ睡しことふく多くハ地上ふ卧し或ハ
船の甲板上ふて夜を明せりきども吾身ハ少
しも平日と異ふるなし其壮健なる所以ハ全く
水よりも強き飲料を用ひざるふよるなり其證

抱ハ我同隊の中ふて慓烈飲料ふ耽ぼたる者ハ大抵病ふ侵さるぼハふし此地ふて死しる者の十中の八九ハ必ず大酒を嗜きたる輩たり故ふ然ゞ如く始終雨露ふ身を晒ぼ者ハ假令一滴の酒たりとも必ず用ひざると上策とふせりといふ但し何方の土地ふ於るも又如何様の生計を為ぼ人ふても酒を戒むべき道理ハ皆同ド事と知るべし

若し酒の大なる害ふ陥りて聊も益なれこと を知ぼ全く飲酒を禁ぜる者ハ又兼て食物の度を定めざる者ハ大醫の説ふ云く過食の害ハ大酒の害ふ齊しと又古き談ふ云く世人已の齒を以て已の墓穴を掘るもの多しと此言実ふ信ある哉

サルゼント氏第三リイドル巻の下終

東京神田
聖堂大成殿